義姉との気持ちいい交尾　～ 淫らな恥肉の誘い ～

直輝／NAOKI

一

　ここに姉ちゃんの女性器が当たっていたんだ。そう思うと、我慢できなくなってきた。

　良太は、鼻にパンティを当て、ベッドの上に仰向けになったままズボンとパンツを下ろした。そして既に先走り液も出ている勃起した性器を握り、ゆっくりと擦り始める。

「あ、あそこに……あそこに挿入れるんだ……」

　洗濯かごからこっそりと持ち出してきた、憧れの義理の姉、美穂の下着は、股間の性器と接触していた部分が黄色く変色していて、べっとりと黄ばんだおりものが付着しており、まだ半乾きで匂うとちょっと生臭い匂いがした。

　美しくも淫靡な顔、たわわに実った豊満な乳房、締まったウエストに透き通るような白い肌、むっちりとした大きなヒップ、そして甘い大人の女の香り……。

「ああ……姉ちゃん……」

　良太はそれらを思い出しながら、目を閉じて握り締めていた肉棒を扱いた。先走り汁が

指に絡み付いてきた。先端から漏れ出てくる透明な先走り汁を拭い、亀頭に塗りつけた。

「姉ちゃん……」

　良太は想像力をさらに働かせ、美穂が自分の目の前で足を広げ女性器を晒しているところを妄想してさらに激しく手を動かす。

　背徳感も手伝ってか、今までのそれとは興奮の度合いが全然違うのだ。

「ああ……いいよぉ……」

　快感が段々高まってきた。先端から我慢液が出て、感触もべたべたしたものに変わっている。

　握り締めた手に力が籠もった。肉棒を握り締めた手の動きが早くなっていった。

「ああ、あ、姉ちゃん……。うっ、あうっ！」

　最後の瞬間が近くなり、良太は手早くティッシュの箱を引き寄せた。

　ちょうど精も溜まっていた頃合だったため、今回の絶頂はいつになく早かった。 射精が近い。一週間は出してない。かなり濃い液が出るだろう。

「ううっ、いくっ……出るぅ……」

　良太の右手は性器をより強く握り、より速く擦り上げる。

「あぁ……いくっ……姉ちゃん……」

　良太の亀頭からは先走り液がしたたり、事を告げていた。良太はティッシュを何枚か抜き取り、最後の瞬間に備えた。やがて……

「だ、出すよ！　姉ちゃん……！　あああ、で、出るぅ……！　あああああ、あああ！」

　程無くして、股間が爆発したかのような衝撃がやって来た。良太は最後の叫び声とともに急いで亀頭にティッシュを被せて腰を突き上げた。次の瞬間、ドビュと良太のペニスの先から精液がほとばしり出た。ティッシュを通して熱い精液の噴出が良太の手のひらを叩いた。

「くぅっ！」これまでにない程の爆発的な射精。

　亀頭を包む二枚のティッシュに精液が染み込んでいく。ティッシュはまるで溢したジュースを拭うかのように瞬く間にびちゃびちゃになった。

「はぁ、はぁ、はぁ、ふぅ……」

　吸い取りきれない精液が溢れて落ちそうになっている。

「あ、やば……」

　慌ててティッシュをもう三枚取りそれを包むように重ねると、溜まりに溜まっていた液が零れるのをようやく防ぐことができた。

「はあ、はあ、ふう……」

　脈動が完全に止まったのを確認してからゆっくりとティッシュを離し、今までにない濃さの液が染み込んだそれをごみ箱に捨てる。

　緊張感で胸の動悸は治まらないけど、これでさっきまでぐいぐいとパンツを押していた性器はずいぶんと大人しくなった。

「ああ、やっちゃった……」

一週間分にもなろう大量の精を出しただけあって、虚脱感も大きい。

「あああ……姉ちゃんとやりてえよぉ……」

二

美穂は胸を高まらせながら良太の部屋に入った。

友人からの電話で外出したので、小一時間は帰ってこないだろう。

中に入ると、いやらしい匂いが微かにした。美穂はゴミ箱の中を探った。

（あった……）

くるまれたティッシュ……。

美穂はそれを手にとって掌に乗せた。まだ生暖かい精液の感触に胸が破裂しそうになった。

（さっき出したばかりなんだ……）

「あああああ……」

良太の性を処理したティッシュはずっしりと重く、きつい男の匂いを漂わせていた。

（ああ……凄い匂い……。それに、こんなにずっしりと……。きっと溜まっていたのね……）

美穂は胸を高まらせて義弟の自慰の残骸を鼻に近付けた。

ああ……男の子の匂い……。

こんなことしちゃいけないんだけど、やめられないの……。

ごめんね……良太……。

下半身が早くも疼きだした。美穂はスカートの中に手を入れ、指で布越しに秘部を刺激し始めた。

初めて良太の部屋の掃除をしてあげた時だった。

軽い気持ちだった。

学校へと出かける良太を見送り、美穂は掃除道具を持ち、十七歳の性の温室へ足を踏み入れた。

「ウッ……」

その「匂い」が鼻をついた。

生命力を漲らせた、濃厚な若い男の匂い。

生臭く……それでいて女の芯を疼かせる淫らな香り。

匂いの元はゴミ箱だった。

大量のテッシュ……。

液体の付着部分が黄色く変色した物が多かったが、最上部の一枚は濡れ、触らずとも暖かさが伝わるようだった。

まさに「出したてほやほや」の精液だった。

美穂はそれを「異臭」とも「悪臭」と思わなかった。

嫌悪感もない……。

むしろ、その場にいる自身に対して羞恥心が湧いた。

それに……-好奇心。

美穂は良太のベッドを探った……。

自慰に耽るにはそれなりの対象物があると思った。

そして、それらの殆どがベッドの下に隠される。良太も例外ではなかった。

夥しい数の成人雑誌……。

中には無修正の本もある。

性具を飲み込み、うねる女性器。

浣腸器を刺し込まれ、震える肛門。

巨大なペニス。

大量の精液を浴びる女体。

自慰慣れした右手が自然と下半身に伸びた。

良太のベッドに座り、脚を拡げる。

下着の上から淫裂をなぞり、クリトリスの突起を擦ってみる。

その瞳は緊縛され巨大なペニスを膣に打ち込まれ、絶叫するマゾ女の写真に釘付けにな

っていた。

　妄想の中、その顔が、「美穂」になる。

　むせ返る若き精液臭の中で、美穂は自慰に耽った。

　義弟の精液に匂いに淫らに濡れる義姉の視線に、良太はまだ気付いていない……。

　美穂は良太のベッドに横になった。

　濡れた女性器がショーツを汚す前に急いで脱ぐと、脚を広げた。

「良太……。あなたの、分身がここにあるわ……」

　枕元に置いていた、通販で買ったばかりの極太バイブレーターを手に持つ。

　パンツの前を大きく盛り上げていた布の下に隠されたものを思い浮かべる。

　あの逞しい身体に見合ったものが隠されているのだ。

「良太……お姉ちゃん、もう我慢できなくなってきたわ……」

　美穂はスイッチを一目盛り入れてみた。微かな機械音がしてバイブが手の中で震え始める。

「良太のも、きっとこれと同じ形なんでしょ？」

　手の平の震えるリアルな形のバイブをうっとりと見つめる。

　これと同じ大きさくらいはある。

「きっと、良太のおちんちんってこれと同じくらい立派なのよね……」

　最近付き合っていた彼氏より一回り大きい太さのバイブ。

　美穂は愛しげに撫でていたバイブを躊躇いなく口に含んでしゃぶる。

「ペチャペチャ……」

　涎を頬に溢しながら舐め続ける。

　わざと音が聞えるように、唾液をたっぷり塗して……。

「ねえ……ああ、気持ちいいでしょ……？　お姉ちゃんのフェラチオ……とっても気持ちいいでしょ？……」

　美穂の女陰が次第に熱を帯びてきた。

「良太……お姉ちゃん、もう堪らないわ。私、欲しいの……」

　足が自然と開き、突き出すように腰を浮かせる。

「私のここに良太のを入れたいの。良太の大きなオチンチンを……」

　バイブレーターを股間にあてがう。

「いいのよ、お姉ちゃんは……もうこんなになってるから」

　本物のペニスを迎え入れる時のように、美穂は足を目いっぱい広げ、指で濡れた淫唇を広げた。

「ああ……おいで……」

　ぬっ！とバイブレーターの先がアソコにめり込む。

「はっ……んンンっ！」

　バイブの頭が膣孔のヒダを押し分け中に潜り込んでくる！

「ああっ、もっと！　　いいのよ、奥まで入れてっ！　お姉ちゃんの……オマンコの奥に……っ！」

　ぐぐっ！と最後の一突きでバイブ全てが飲み込まれた。

　太いバイブの挿入感が凄くて声も上げられない……！

「入ったよ……全部！　　お姉ちゃんの中に！　ああっ！　ビクビク動いている……私の中で動いてるわ……」

　バイブ振動が、膣奥に当たって感じる。

「良太の、良太のオチンチンがいっぱい……」

　美穂はスイッチをもう一目盛り増やした。

「あああああ！　良太！　もっと突いて！」

　お尻の部分をのぞかせているバイブレーターをズルズルとアソコから引き抜く。

「はっ……はあぁっ！　　ああああン！」

　バイブの頭のエラが膣の中を掃除するように、内襞を引っかきながら外へ出ようとする。

　エラが出てしまう直前で止めて、再び奥へと突き入れる！

「ああン！　　また、入ってくるぅ……っ！　良太のが奥まで入ってくるの！」

　無意識にお尻の穴を窄めて膣を収縮させる。

「あああっ！　オマンコが勝手にっ！」

　再びバイブが引き抜かれ、そしてねじ込まれる。

　何度も突き立てられてイキそうになる。

「あン！　　ああン！　　ねっ……お願い、私、もうダメなの！」

　美穂が切羽詰まった声をあげる。

「いいよ、私も……もう。一緒にイクよ、良太！」

　美穂は、奥まで突き入れられていたバイブのスイッチを端までスライドさせて、最強にした。

　それまでの微弱な振動から打って変わって、バイブがまるで生き物のように、のたうち、暴れ始めた！

「ふあぁぁっ！　なにこれ！　お腹が……はあぁ！　良太のが、暴れてる……っ！　私のオマンコ、無茶苦茶にしてっ！」

　膣の中だけじゃなく、頭の中までがグチャグチャになる。

「はあっ！　　助けて！　良太！　助けて！　　おかしくなっちゃう！　いゃっ！　はぁぁぁン！　イクっ！　イクぅぅぅっ！　一緒にっ！　はぁぁぁぁぁああん！」

　長い叫び声を上げて美穂はシーツに突っ伏した。

　記憶が途切れてからどのくらいたったのかしら……。

　シーツから身を起こすと、カーテン越しに夕日がぼんやり輝いている。

　もう、四時前……か。

ふと横を見ると、べっとり愛液を絡ませたバイブが女の匂いを放っている。

シーツにも少し染みが付いている。

さっきまでの恥ずかしい行為を思い出して身を固くする。

あの子の前でどんな顔をすればいいの？

血の繋がりがないとは言え、弟である。

その弟と一線を越えてしまう場面を想像しながら、言い訳出来ないほど乱れて、果ててしまった……。

普通のカップルだって、あんなに激しくお互いを求めて愛し合うなんてしないわ……。

最近、良太の私を見る目にどこか淫靡なものを感じる。

あの子の目を欲情でギラギラした目にしてやりたい。

（体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願いいたします。）